◆新潟日報　2016年6月22日

# 雪冷熱センター稼働

## 津南 県、電力削減効果を検証

県と県内外の企業が津南町中深見に建設を進めていた、雪をコンピューターの冷却源に使う「雪冷熱活用データセンター（DC）」が完成し、21日に現地で運転開始式が開かれた。県は9月ごろまで、消費電力の削減効果などを検証する。

電子化した情報を保管するDCは、熱を発するコンピューターのサーバーを冷却する必要がある。このDCでは、敷地内に約3千立方メートルの雪を断熱シートで覆って保管し、解けた水を冷房に活用する。県は電気冷房を使う一般的なDCと比べ、電力消費がほぼ半減すると見込む。

県は昨年、積雪量や交通の利便性などの観点から津南町での建設を決め、雪の貯蔵設備や冷気を送る機器を整備した。また電気通信業のアオスフィールド（新潟市東区）など4社の共同企業体が県から委託を受け、サーバーの入ったコンテナを設置。ことし5月から試運転していた。施設の管理運営は、共同企業体メンバーでIT関連企業のゲットワークス（さいたま市）が遠隔操作で行っている。

運転開始式で、保存されている雪（右奥）を背にテープカットする関係者＝21日、津南町中深見

運転開始式には泉田裕彦知事や津南町の上村憲司町長、受託事業者らが出席し、テープカットをした。泉田知事は「近年は海外にデータを置く例も増えているが、安全保障の観点からもデータは国内に置いておくべきだ。雪冷熱DCの優位性を広め、より多く利用してもらえるよう環境整備を進めたい」と話した。